様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２６３５

研究課題名（和文）現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究

研究課題名（英文）A phonetic and phonological comparative study of the languages of modern Spain

研究代表者
福嶌　教隆（FUKUSHIMA, Noritaka）

神戸市外国語大学・外国学研究所・名誉教授

研究者番号：５０１０２７９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：スペインでは、一般に「スペイン語」と呼ばれている「カスティーリャ語」以外に、カタロニア語、ガリシア語、バスク語などが用いられている。本研究では、日本スペイン語学セミナー第38回大会（2018年8月開催）で、これら４つの言語の音声・音韻的現象に関する研究級発表を行った。また2019年3月に、研究成果報告書を刊行し、４言語の音声・音韻的現象を14の側面から記述した対比一覧および6本の論文を発表した。さらに、これまでに本研究チームが作成した形態論に関する17の項目、総論・統語論に関する23の項目の対比一覧の再録と、日本における文献一覧を加えて、スペインの主要4言語に関する総合的な鳥観図を提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の第1の意義は、スペインで用いられている4言語（スペイン語、カタロニア語、ガリシア語、バスク語）の音声・音韻的現象について一目で見渡せる鳥観図を示したことである。これまでに本研究チームが行った統語論、語彙論、形態論の研究とともに、いわば「スペインの諸言語のロゼッタ・ストーン」を構成している。このような研究は少なくとも我が国には前例がない。研究成果報告書は日本各地の研究機関や言語学者に無償配布され、これまでの報告書とあわせて大いに活用されている。第2の意義は、本研究チームの構成員がそれぞれ専門とする言語について、音声学・音韻論に関する研究論文を発表し、学術的貢献を行ったことである。

研究成果の概要（英文）：This project focuses on the four major languages spoken in Spain: Castilian Spanish, Catalan, Galician and Basque. In August 2018, our team gave a research presentation on the phonetics and phonology of these languages at the 38th meeting of the Spanish Lingustics Seminar of Japan. Another academic contribution of this project is a report published in March 2019 that provided 14 tables of phonetic and phonological topics of these languages, as well as 6 monographs. The report also presented 17 tables of morphological topics and 23 tables of general and syntactic topics of all four languages. Combined with a vast list of bibliographical data, the report, as a whole, offers a bird's-eye view of the major languages in modern Spain.

研究分野：スペイン語学、言語学

キーワード：スペイン語（カスティーリャ語）　カタロニア語　ガリシア語　バスク語　音声学　音韻論

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 2007 年の段階では、多言語国家スペインで用いられている諸言語については、各々の研究は進んでいたが、それらを同一の指標で捉える横断的な研究は十分とは言えなかった。そこで福嶌教隆（研究代表者）は、各言語の専門家とチームを作り、スペインの主要４言語の対比的研究を実施することにした。

(2) 2007 年度より次のように 3 期にわたり、統語論、語彙論、形態論に関する対比的研究を行い、各期、最終年度に研究の名称と同一の題名の研究成果報告書を公刊した。
第１期：「現代スペインの諸言語に関する統語的研究」（平成 19～21 年度〔2007～2009 年度〕科学研究費補助金（基盤研究（C））研究，課題番号 19520359）。
第２期：「現代スペインの諸言語の語彙に関する対比的研究」（平成 22～24 年度〔2010～2012 年度〕科学研究費補助金（基盤研究（C））研究，課題番号 22520440）。
第３期：「現代スペインの諸言語の形態論についての対比的研究」（平成 25～27 年度〔2013～2015 年度〕科学研究費補助金（基盤研究（C）研究，課題番号 25370492）。

(3) 第 3 期終了時点で、音声学・音韻論に関する対比的研究が未だ本チーム以外でも行われていなかったので、第 4 期として、この問題を探究することとした。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は，多言語国家スペインで用いられている諸言語の音声学・音韻論に関するさまざまな問題について，共通の問題意識をもった記述と分析を行うことにある。

(2) 考察対象とする言語は、スペイン語（カスティーリャ語）、カタロニア語、ガリシア語、バスク語である。

３．研究の方法

(1) 研究チームは 4 人で構成される。
研究代表者：福嶌教隆。カスティーリャ語担当。総括担当。
研究分担者：長谷川信弥。カタロニア語担当。
同：浅香武和。ガリシア語担当。
同：吉田浩美。バスク語担当。

(2) 研究チーム構成員は、各言語の音声・音韻的現象に関するテーマの研究にあたる。第 1 年、第 2 年に研究会を開いてそれぞれの研究の進捗状況を確認した。第 3 年に全国規模の学会でワークショップを開催し、研究成果を発表する。

(3) 研究チーム構成員は、「単母音」「母音連続」「子音の音素体系」「単子音①閉鎖音」のような 14 項目について、それぞれの言語の記述を行い、4 言語を一目で見比べられる一覧を作成する。

(4) 最終年度に、(2)と(3)の成果をまとめた研究成果報告書を刊行する。

(5) これらの共同研究に加えて、各構成員は期間内に次のような研究活動を行った。
　平成 28 年（2016 年）度：福嶌教隆は九州大学で開催された日本ロマンス語学会第 54 回大会で研究発表を行った（2016 年 5 月）。長谷川信弥はスペインのバルセロナ大学に出張し調査を行った（2017 年３月）。浅香武和は『新ガリシア語文法』（栄文社）を刊行した（2016 年 10 月）。吉田浩美は『ニューエクスプレス バスク語』（白水社）を刊行した（2017 年１月）。また、スペインのバスク自治州に出張し調査を行った（2017 年２～３月）。
　平成 29 年（2017 年）度：福嶌教隆は神奈川大学で開催された日本イスパニヤ学会第 63 回大会で研究発表を行った（2017 年 10 月）。長谷川信弥はスペインのバルセロナ大学に出張し，現地研究者と意見交換をし、資料を収集した（2018 年３月）。浅香武和はスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ大学でガリシア語に関する２つの研究発表を行った（2017 年７月）、吉田浩美は京都大学で開催されたユーラシア言語研究コンソーシアム 2017 年度大会で研究発表を行った。また、論文「バスク語アスペイティア方言の「後置詞に見える形態素」と「後置詞」の区別 −アクセントの観点から−」を『ユーラシア諸言語の多様性と動態−20 号記念号− 追悼 庄垣内正弘先生』に発表した（いずれも 2018 年３月）。
　平成 30 年（2018 年）度：福嶌教隆は、スペインのサラマンカ大学で開催された米国スペイン語ポルトガル語研究者連盟（AATSP）第 100 回大会に参加し、Darío Villanueva スペイン王立学士院院長らと意見交換を行った（2018 年６月）。またセルバンテス文化センター東京で開かれたスペイン学に関する国際学会においてスペイン語による研究発表を行った（2018 年 10 月）。長谷川信弥はスペインのバルセロナ大学に赴き、同大学の研究者と意見交換をし，研究調査と資料収集を実施した（2019 年 3 月）。浅香武和はスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ市の人文科学研究所でガリシア語による講演を行った（2018 年 12 月）。吉田浩美はスペイ

ンのバスク地方に赴き、現地調査を行った（2019 年２月）。

(6) 以上のように、メンバー全員が全期間を通じて科研費を有効に利用して積極的な研究活動を行った。多くの著作も行った。本研究は，最終年度に全国規模の学会でワークショップを開催したこと、神奈川大学の学術シンポジウムで招待発表を行ったこと、及び研究成果報告書を出版したことで、当初の目的を達成することができた。

４．研究成果

(1) 研究チームは山梨県で開催された日本スペイン語学セミナー（SELE 2018）で「スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する諸問題」というテーマでワークショップを開き、それぞれが研究発表を行った（日本スペイン語学セミナー第 38 回大会（SELE 2018)、於東海大学山中湖セミナーハウス（山梨県南都留郡山中湖村)、2018 年 8 月 28 日)。

(2) 神奈川大学からの招待により、同大学で開催されたスペインウイーク 学術シンポジウム「スペイン言語の多様性」、2018 年 11 月 30 日）でそれぞれが各言語の紹介を行った。

(3) 平成 31 年（2019 年）3 月に A４版 220 ページから成る研究成果報告書を発行した。これは「スペインの諸言語のロゼッタ・ストーン」、あるいは「現代の Biblia Políglota Complutense」の一部を成すべく編まれた一連の著作の第４巻の位置を占めるものである。第２章「スペインの諸言語の音声・音韻的現象対比一覧」は，その目標を端的に具現した章であると言える。14 の項目について見開きの形で４言語の主な特徴を記述している。第３章「スペインの諸言語の形態論対比一覧」と第４章「スペイン語の諸言語の概論・統語論対比一覧」は、第１期と第３期の研究成果報告書に発表した内容を再録したものである。これにより、概論，音声学・音韻論、形態論、統語論について、スペインの４言語の状況を一目で見比べることができる。第５章「スペインの諸言語の音声・音韻的現象の研究」には、(1)に記したワークショップでの発表内容を発展させた論考３本（カスティーリャ語、カタロニア語、バスク語）と、ガリシア語の与格代名詞の音形に関する論考をおさめた。更に、カスティーリャ語の実験音声学に関する博士論文(神戸市外国語大学講師 柳田玲奈)とカスティーリャ語の通時音韻論に関する修士論文(大阪大学大学院生 田中祿丸）の要旨を加えることにより、音声学・音韻論の全体像に関する話題を提供することができた。第６章「スペインの諸言語に関する日本における文献一覧」は、これまでに蓄えられた知見の存在を知らしめる目的で編まれた章である。一般の電子媒体による書誌データベースからは得にくい情報も掲載している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 福嶌教隆、書評:Busch, Hans-Jörg. A Complete Guide to the Spanish Subjunctive、Hispánica、62 号、2018、131-135

② 吉田浩美、バスク語アスペイティア方言の「後置詞に見える形態素」と「後置詞」の区別 －アクセントの観点から－、ユーラシア諸言語の多様性と動態－20 号記念号－ 追悼　庄垣内正弘先生、2018、487-501

② 福嶌教隆、イスパニア語の tough 構文について（下の３）、神戸外大論叢、66 第２号、2016、111-129

③ 浅香武和、カンバードスにおけるガリシア語のヘアーダを考える、津田塾大学国際関係研究所報、52 号、2017、1-10

④ 浅香武和、現代ガリシア語におけるヘアーダ(gheada)の後退について、津田塾大学紀要、49 号、2017、277-286

⑤ 福嶌教隆、スペイン語の２つの接続法過去について、ロマンス語研究、50 号、2017、31-40

⑥ 浅香武和、ガリシア語の人名定冠詞の用法に関する考察、ロマンス語研究、49、2016、21-26

〔学会発表〕（計 21 件）

① 福嶌教隆、長谷川信弥、浅香武和、吉田浩美、スペイン言語の多様性、神奈川大学学術シンポジウム、2018

② 福嶌教隆、La distribución geográfica del uso del subjuntivo、3er. Congreso Internacional sobre el Español y la Cultura Hispánica、2018

③ 福嶌教隆、外来語がスペイン語の音韻体系に与える影響について、日本スペイン語学セミナー第 38 回大会、2018

④ 長谷川信弥、カタロニア語における音声規範の記述の変遷について、日本スペイン語学セミナー第 38 回大会、2018

⑤ 浅香武和、現代ガリシア語におけるヘアーダに関する調査報告、日本スペイン語学セミナー第 38 回大会、2018

⑥ 吉田浩美、バスク語（アスペイティア方言）の名詞のアクセントに関する報告、日本スペイン語学セミナー第 38 回大会、2018

⑦ 浅香武和、A presentación da edición en xaponés de Follas novas de Rosalía de Castro ”、

Centro Ramón Piñeiro Para a Investigación en Humanidades、2018
⑧ 吉田浩美、最近のフィールドノートから―スペイン領バスク自治州のバスク語に関する報告―バスク語サラウツ方言の名詞・複合語・派生語のアクセント（中間報告）、ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、2018
⑨ 福嶌教隆、外来語がスペイン語の音韻体系に与える影響についての考察２．この問題に言及している文献の整理」、「現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究」第 2 回研究会、2017
⑩ 長谷川信弥、カタロニア語音声の規範の記述について、「現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究」第 2 回研究会、2017
⑪ 浅香武和、ガリシア語のヘアーダ ―カンバードスでの調査から―、「現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究」第 2 回研究会、2017
⑫ 吉田浩美、バスク語サラウツ方言の名詞のアクセント ～世代間の相違？～、「現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究」第 2 回研究会、2017
⑬ 福嶌教隆、de ahí que 節の叙法選択について、日本イスパニヤ学会第 63 回大会、2017
⑭ 浅香武和、Poesías en galego, cantata aos ilustres poetas galegos、XXX Edición conmemorativa dos cursos de verán de lingua e cultura galegas、Galego sen Fronteiras、2017
⑮ 浅香武和、Homenaxe a Ramón Cabanillas e poemas galegos、Auditorio da Xuventude、2017
⑯ 吉田浩美、バスク語アスペイティア方言の名詞のアクセント（中間報告）、2016 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、2017
⑰ 福嶌教隆、外来語がスペイン語の音韻体系に与える影響についての予備的考察、現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究」第 1 回研究会、2016
⑱ 長谷川信弥、カタロニア語方言における音声について (1)、「現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究」第 1 回研究会、2016
⑲ 浅香武和、サンティアゴ・デ・コンポステーラ近郊におけるヘアーダの後退について、「現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究」第 1 回研究会、2016
⑳ 吉田浩美、バスク語アスペイティア方言のアクセントに関する調査（中間報告）」、「現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究」第 1 回研究会、2016
㉑ 吉田浩美、バスク語アスペイティア方言の「後置詞に見える形態素」と「後置詞」の区別、日本言語学会第 152 回大会、2016

〔図書〕（計 11 件）
① 福嶌教隆 他、Ediciones Universidad Autónoma de Madrid、Exploraciones de la lingüística contrastiva español-japonés、2018、194
② 福嶌教隆 他、De Gruyter Mouton、Handbook of Japanese Contrastive Linguistics、2018、722
③ 浅香武和、論創社、新西班牙語事始め、2018、285
④ 浅香武和・訳、栄文社、新葉集、2018、230
⑤ 浅香武和、栄文社、新ガリシア語文法 改訂版、2018、175
⑥ 浅香武和、Universidade de Santiago de Compostela、Limba noastră i o comoară. Estudos de sociolingüística románica en homenaxe a Francisco Frenández Re、2018、220
⑦ 浅香武和・訳、栄文社、オセイドス（コウレルの地）、2017、164.
⑧ 吉田浩美・訳、Susa、Chuya Nakahara、2017、62
⑨ 吉田浩美・訳、Katakrak、Nagusia kanpoan bizi da / 1928ko martxoaren 15a、2017、269
⑩ 浅香武和、栄文社、新ガリシア語文法、2016、169
⑪ 吉田浩美、白水社、ニューエクスプレス バスク語、2016、156

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕（計 1 件）
① 福嶌教隆、長谷川信弥、浅香武和、吉田浩美、神戸市外国語大学、現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究（科学研究費補助金研究成果報告書）、2019、220

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：長谷川信弥
ローマ字氏名：HASEGAWA, Shinya
所属研究機関名：大阪大学
部局名：言語文化研究科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：20228448

研究分担者氏名：浅香武和
ローマ字氏名：ASAKA, Takekazu
所属研究機関名：聖心女子大学
部局名：文学部
職名：その他
研究者番号（8 桁）：20516348

研究分担者氏名：吉田浩美
ローマ字氏名：YOSHIDA, Hiromi
所属研究機関名：神戸市外国語大学
部局名：外国学研究所
職名：客員研究員
研究者番号（8 桁）：70323558

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。